

三省堂新書 19

物価抵抗史

立ちあがる消費者

大門一樹

三省堂

はしがき

物価値上げの季節がつづく日本であるが、消費者もじっとしてはいられない。値上げ反対の署名運動や陳情、座りこみなど、値上げへの抵抗はつづけられている。

ねばりづよい反対の結果、成功することもあるが、「寒い、こごえるような雪の日に、街頭に何時間も立ちつくして署名を集めたが、上がるものは上がってしまつて何の効果もなかった」などと、あきらめムードが消費者団体の意気を沮喪させることもある。

消費者時代といわれ、消費者の権利、要求が重要視され、マスコミも消費者団体の行動などを好んで報道するようになったが、しかし、物価は上がつて、消費者の抵抗はまだ弱いことをおもわせている。

「日本の消費者はおとなしい、あきらめやすい、物価や消費問題への抵抗の関心は稀薄だ」と言われている。外国の大衆とくらべると生活・消費についての知識水準は低く、高い値段や悪い品質などの不合理に対して行動する力が弱いと言われている。

消費者は、労働者としては生産点の搾取に対して、団結し組織づくりをして、かなり強い抵抗を示している。ところが、消費点における搾取に対してはまるで無関心な存在——消費者不在などとも言われている。

果たして消費者は無関心、無抵抗な存在なのか。明治百年の歴史で、消費者たちは高い物価にどのような反応を示してきたのか、それを検討することは、日本の消費者の社会的性格の理解に役立つとおもわれる。

明治いらいの大衆の抵抗の文献は山のように積まれているが、あるのは農民運動、労働運動に關するものばかりで、安い賃金や労働者の解放についての事実は山のように語られているのに、物価への消費者の抵抗については何も書かれていない。まるで、労働者や農民は存在してしたが、消費者というのはいなかったかのようなようだ。それでは抵抗の事実がなかったということか。まずそれをたしかめることが必要になる。

当時の新聞や雑誌などを調べてみると、家賃値上げ反対とか、電車賃値下げの要求、などという記事が出てくる。これらを根気よく追跡して行くと、当時の大衆が物価に抵抗した事実がギレギレに浮んでくるが、それらは、労働運動や農民運動の巨大な事実の記録の谷間に埋没してしまつて、単なる市井の雑事として扱われているのである。

しかし、消費者の抵抗史は発掘できるのである。この抵抗史はさまざまな角度から見ることができるが、本書では、日本の大衆が物価への抵抗において示した強烈なエネルギーの事実を紹介することに重点を置いた。戦前の日本人が置かれた条件、そのなかで大衆の示した抵抗のつよい精神は、現在および今後の消費者の抵抗を理解し、予測するための一つの資料となることができ

る。

現代の消費者は体制の霧のなかで孤独な状況におかれている。「ゆたかな社会」の大衆は物価の圧迫で困窮する。いっそうわるいことは、体制の霧がかれるの抵抗意欲を拡散させていることである。また、抵抗に立ち上がった人びとも、霧のなかに方向を見失って立ち迷っている、といえそうだ。この霧から、どのように脱却して、どこに向かうべきかの追求がなされなければならぬ時代に当面しているようである。

昭和四二年一月

著者

もくじ

はしがき

I 「ゆたかな社会」の物価

消費革命と価格構造……………

2

勤儉節約から「消費は美德」へ(一) イメージを売れ(三) 一二円の

マユズミが一五〇円に(四) 浪費作戦(六) 浪費の強制(七) 抵抗の

今昔(八)

物価への疑問……………

9

すべての物価があがる(九)

独占・流通機構・賃金……………

13

主因はインフレーション(一三) 独占―協定と競争(一四) カラーテレ

ビ事件と黒い協定(一六) 大企業と価格の強制(一八) 大きな中間マー

ジン(二〇) 鉄鋼のカラクリ(二三)

黒い物価	25
安い貨物運賃・高い旅客運賃 (三三)	
鉄鋼の運賃みかんの五分の一 (二六)	
私鉄の土地買占め・『傷だらけの山河』 (二六)	
賃金と物価	32

II 消費者の抵抗史

明治の抵抗	36
明治のくらし	36
新時代と貧しいくらし (三六)	
勤儉節約と低賃金 (三七)	
戦勝と物価高 (三七)	
糞尿紛議	38
くみ取り拒否運動 (三六)	
糞尿溜場難 (四一)	
明治の米騒動	43
明治二三年の騒動 (四三)	
各地の騒動 (四四)	
明治三〇年の騒動 (四四)	
信州飯田で精米所襲撃 (四六)	
理髪店のカルテル	50

同業組合のカラクリ (五〇)	
電車焼打事件	53
日比谷に集まった二千人 (五三)	
兇徒聚集・挫折した値上げ (五三)	
空砲を放った憲兵 (五五)	
電車ポイコット運動 (五〇)	
主催者のいない市民大会 (五三)	
フロ代値上げへの対策―共同浴場	64

大正の抵抗	65
大正のくらし	65
『戦争成金』の登上 (六五)	
物価高と『貧乏物語』 (六五)	
一寒村の抵抗記録	66
『夢痕集』 (六七)	
不点火同盟崩れる (六八)	
企業と権力の結託 (七五)	
電車賃値上げ反対の紛争	77
大正の米騒動	82
その発端 (六三)	
暴動化―京都のばあい (六四)	
新しい資料 (六七)	
暴発の深刻な波紋 (六九)	
米騒動の影響 (六三)	
借家・借地人の抵抗	94

借地人の立退拒絶 (四七)	値上げに反対した学者連 (四七)	家主の暴力
団を追払う (四七)	借家借地人の歌 (四九)	
学生の下宿征伐		101
不買同盟		105
呉・佐世保での不買 (一〇五)	当局、値段申し合せを禁ずる (一〇六)	

昭和の抵抗

昭和のくらし		108
パニックと戦争時代 (一〇八)	物価三七〇倍・地価二千倍 (一〇九)	
暴力に勝った灘神戸生協		110
全国化した家賃・地代抵抗		115
深川民衆自治会 (一一五)	文化人の演説会 (一二六)	阪神地方での展開 (一二六)
暗黒のなかの市民抵抗		120
独占・電灯会社と闘う (一二〇)	料金不納同盟 (一二四)	同情消灯の拡大
(一二三)	全国化した電灯料抵抗 (一二三)	
ガス料金値下げ運動		135
水道会社打倒		137

生協弾圧

物価抵抗の現状

知らされなかった抵抗 (一四一)	ある市民運動の勝利 (一四六)	私鉄への
反撃 (一五二)	盛り上がった牛乳抵抗 (一五三)	座りこむ主婦たち (一五九)
間借人協会 (一六〇)		

III 抵抗の論理

戦前と戦後

消費の自由? (一六四)	新しい窮乏感 (一六五)	抵抗環境の変化 (一六六)	挫
折 (一七〇)			

消費者はなぜ孤独か

疎外の時代 (一七二)

霧のなかの抵抗

夢はバラ色? (一七四)

消費者行政・教育の霧の実態 (一七五)

あるキャ

ンペーンの記録 (二八四) 消費者の四つの権利 (二八五) 消費点における擯

取 (二八七) マスコミ対策 (二九〇)

裸の王の空位と復権……………

恐りの構造 (二九二) 抵抗の図式 (二九四) たちあがる消費者 (二九七)

絶えざる抵抗を (三〇〇)

物価抵抗年表……………